

いた方が、とくに妻にはよかったはずなのですが、まことに人生には、もしもという仮定法はなかったのだと痛感します。

爾来、44年、いまは原発災害に苦しむ福島に住み続けています。14年半前に65歳で福島大学を定年で退官したあと、信州上田の長野大学に3年通い、そのあと11年半、高崎健康福祉大学に創設以来、勤務し、いまは大学院の特認教授だけを残しています。

4. 文男先生とのことを一点だけ

私は、文男先生からは「外書購読」風の授業を受けましたが、当初は内容がほとんど理解できませんでした。文男先生は、外国語にとっても強かったばかりでなく、文献考証力においても非常な力をおもちでした。そういうことは黒滝さんにお願ひし、ただ一点だけ私の学問的な接点についてふれ、はなしを閉じます。

息子の病気と障害のために1995年以来、障害者福祉活動を続けていたこともあって、福島大学の定年後には福祉系の学部・学科に勤務し、社会保障論と公的扶助論を担当しました。そこでその分野の理論研究にも関心が向かい、その中で経済学における公的扶助論の理論的原点を探ることを試みたことがあります（拙著『社会保障の基本問題』未来社の第二章に再録）。文男先生は、ご労作『マルクス探索』（新日本出版社1999年）所収の二つの玉稿で、繰り返し私の拙稿を紹介されながら、「受救貧困」・「受救貧民」論研究の重要性を明らかにされておられます。今日の日本において生活保護問題が、「日本国憲法」25条の生存権保障とそれを担保するための社会保障のうち生活保護が「最後のセイフティ・ネット」としてますます重要な問題となっているとき、文男先生の学問的ご指摘は輝きをましており、その接点に学問的に參與できたことを幸せに思い、またありがたく思うものです。

ご清聴、ありがとうございました。

恩師 服部文男先生の生涯・研究と服部文庫

黒 滝 正 昭（宮城学院女子大学名誉教授）

I 服部文男先生の生涯と研究

服部文男先生は、1923年6月28日（木）午前9時、大阪府堺市の大島仲太郎（母方の祖父）宅で服部英太郎・美代夫妻の一人っ子として生まれ、2007年12月30日（日）仙台市の東北大学医学部附属病院に入院中に逝去された。享年84歳と6か月である。[このように曜日がすぐ分かるのは、文男先生から生前頂いた手作りの万年暦のお蔭である。因みに生年1923年の9月1日（土）関東大震災。昨年2011年3月11日（金）東日本大震災 etc.]

私が最初に文男先生とお会いしたのは、1962年4月、東北大学川内分校（教養部）で受講した経済学部2年次専門科目「ドイツ語経済書講読」の授業で、テキストはKarl Marx, *Lohnarbeit und Kapital*であった。最後に先生とお会いしたのは亡くなる2日前、2007年12月28日、大村 泉氏（東北大学経済学部教授。服部遺文庫引き渡しの服部門下側責任者）と共に入院中の大学病院に御見舞した時で、ご家族の付き添いの下、先生は酸素マスクをしたま

まベッドに横になっておられたが、力強い握手をして下さった。[因みに私が服部英太郎先生に初めてお会いしたのは、御定年前最後の1962年度「社会運動史講義」（経済学部2年次専門科目で、川内ではなく片平法文1番教室で行われた）を受講した時。最後にお会いしたのは、1963年2月9日（土）午後に行われた最終講義（同上教室）を聴講した時であった。]

さて服部文男誕生時に戻ると、男児の誕生ということで母服部美代は、英太郎の母等から「お手柄でした」と大変な祝福を受けたが、夫妻は「万里」（マルクスのマ+リッケルトのリ=マリ）という女の子の名前しか用意していなかったため、急遽考えたが良い知恵が浮かばず、結局両親の名を一字ずつ取って「英美（ひでよし）」と名付けようとした。しかし双方の母親が頑として反対。美代の母は「小学校に行ったらからかわれる」と泣き出し、英太郎の母からは、夫婦対等に一字ずつといった「男女同権など思いもよらぬこと」と叱られ、結局、軍人にはなってくれぬよう、また誕生前に英太郎が心配して、赴任先の仙台から60字を超える長文の電報を数回くれた意も含めて、「文男」と命名したということである（服部美代「服部英太郎の思い出など」、大友福夫編『社会政策四十年－服部英太郎博士追悼・遺文集－』未来社1967年12月）。

その後青葉幼稚園（仙台・元柳町）、宮城県男子師範附属小学校、宮城県仙台第二中学校を経て、1940年旧制第二高等学校文科乙類（独法）に合格し、剣道部に入部した。秋、東京駒場の旧制一高道場で一高「撃剣部」相手に練習試合中、道場片側の木製の台に腰部激突。それが元で腰椎カリエスという重病を患い、1942年ギブスベッド及びコルセットを用いた療養生活に入ることになり、8月東北帝国大学医学部附属病院外科に入院。11月、父服部英太郎教授が文部省からの思想弾圧・圧力で「依願免本官」とされ、次いで検挙された。そうした中で服部文男は1943年10月京都帝国大学文学部哲学科に入学。1944年2月特高による英太郎保護観察の都合で、服部一家は東京に移住させられた。敗戦後再び仙台に戻るまで、文男はギブスベッドに仰臥していた。1946年東京帝国大学経済学部へ転学し、49年3月卒業。4月東北大学経済学部大学院特別研究生。51年東北大学第三教養部（現向山高校の場所）講師（非常勤）ドイツ語経済書講読担当。52年6月東北大学第一教養部（三神峰）講師、第二教養部（南六軒丁）講師を兼任、一般教養経済学担当。55年4月東北大学経済学部講師。57年4月同助教授となり、新設の社会思想史講義担当。58年4月社会思想史演習開設。62年3月経済学博士（東北大学）（博士論文「マルクス主義の形成と発展*」）の学位を授与された。65年3～8月アジソン氏病（カリエスの治る頃に冒され易い副腎機能の急激低下）で東北大学医学部附属病院入院。70年10月東北大学経済学部教授となり、以後補導協議員、評議員、学生部長、経済学部長を歴任。87年1月23日（金）最終講義（「人と思想と本」）を行い、87年3月東北大学を停年退官した。88年4月～91年3月宮城学院女子短期大学国際文化科契約教授。2005年8月肺（腺）癌と告知され、イレッサ服用開始。07年11月酸素補給療法に切り替えたが、12月4～13日「胸水貯留」排出のため東北大学医学部附属病院に入院・手術。12月25日年末年始を安全に過ごすため再度入院したが、12月30日容態が急変して、深夜に逝去された（大村泉・窪俊一編『観の眼 見の眼－服部文男随想録－』服部先生の思い出を語る会2008年3月；大村泉・大和田寛・荒川繁・石原博・長山雅幸編：東北大学社会思想史ゼミナール 会報特別号『源泉』1987年3月；大友福夫編『社会政策四十年－服部英太郎博士追悼・遺文集－』未来社1967年12月）。

*この博士論文でいう「発展」は、次に掲げる服部文男主要業績の二冊目の『発展』とは全く内容を異にしている点は注意されねばならない。即ち前者では、すべて帝国主義論に関わる論文が収められている：一 初期レーニン思想；二 「二つの道」の理論と帝国主義論；三 カウツキーの「超帝国主義」論 の三論文である（黒滝正昭「服部文男氏の帝国主義論研究（上）」、『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第50号【故服部文男教授追悼号】、八朔社2009年1月、123-125頁参照）。

服部文男先生の主要研究業績は、2冊の主著『マルクス主義の形成』（青木書店1984年4月）；『マルクス主義の発展』（青木書店1985年5月）に収録されている。二著書の各篇タイトルを列挙すると：マルクス主義の源泉としての空想的社会主義、マルクス主義とマルクス＝エンゲルス研究〔新MEGA研究〕、『経済学・哲学手稿』の研究；『共産党宣言』の成立、『資本論』の成立、といったテーマが中心であることが分かるが、それに加えて主著には収録されていない帝国主義論（レーニン、ブハーリン、ヒルファーディング、カウツキー等）に関する政策思想的・文献学的研究も、非常に貴重なものである。そのさい研究文献や資料の徹底した探索と、それらによる資料的裏付けの追求と理論的・思想的分析の深さがもの凄いのである。

例えば、今まで帝国主義論研究者が誰もやろうとしなかったこと、すなわちレーニン『帝国主義論』のオリジナル手稿コピーを入手して、それがレーニン筆跡のカーボン紙控えの手稿（最後の注部分1枚のみ欠落）とクループスカヤ夫人筆跡の直接手書き原稿（全体の半分近く欠落）と2種類あったこと、前者の元々のレーニン直接手書き原稿の方は途中で没収されて出版社には届かず、そのため急遽夫人が前者を基に改めて手書きした後の方が、『帝国主義論』初版のために直接出版社に届けられた原稿でありその現存する部分であること、前者（レーニン筆跡）と後者（クループスカヤ筆跡）とは表現に異なる部分があり、比較検討が必要なこと、さらに後者の原稿が半分近く失われた状態にあるのは何故なのか等々、新たな知見と共に『帝国主義論』形成史研究には、なお多くの未解明課題が残されていることを具体的に明らかにした（服部文男『『帝国主義論』手稿から明らかになったこと』、『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第36号、八朔社2001年3月；服部文男『マルクス探索』新日本出版社1999年8月）。

もう一つ、今度は主要業績の方から例を挙げてみたい。『共産党宣言』成立史研究という日本では取り上げられることの少なかった領域において、社会思想史と運動史を内的に結合させたダイナミックな展開として捉え、パリに本部を置いたドイツ人職人共産主義組織「正義者同盟」の中でワイトリングの共産主義が次第に影響力を失って、代わってフォイエルバッハ理論が取り入れられるようになった経過、それに対応してマルクスとエンゲルス等が「共産主義通信委員会」（在ブリュッセル）をベースに、フォイエルバッハの理論的弱点の批判に取りかかること（「フォイエルバッハに関するテーゼ」、『ドイツ・イデオロギー』等）など、イデオロギー批判の現実的・運動史的意味を明瞭にした。

そうした展開の結果として生まれた『共産党宣言』は、マルクスの単なる個人的著作ではなく、「正義者同盟」が生まれ変わった新たな国際的な共産主義運動組織「共産主義者同盟」（本部在ロンドン）の綱領としてマルクスに起草が委ねられたということの意味は、今日の学界でも軽く見られる傾向があるが、前身の「正義者同盟」にマルクス、エンゲルス等が何故どのように加入したか、組織・運動内の職人指導部とマルクス等「学者」との対立、どのような討論がその間で行われて新たな綱領と規約を持つ「共産主義者同盟」への組織転換が合意されたの

か、何故マルクスに綱領の起草が委ねられたのか等々を、「正義者同盟」の議事録や手紙、内部文書、大会記録文書等に内在して叙述することで、従来のイデオロギー的な『共産党宣言』研究の域を遙かに超えて、当時のリアルな運動の現実を浮き彫りにした。国際的に見てこの領域の研究が最も進んでいた当時の東独やソ連の研究と比較しても、それらを上回る学問的水準を築いたと言えよう。

Ⅱ 服部文男先生の研究と「服部文庫」

此の度尚絅学院大学が創立120周年記念事業の一環として開設された「服部英太郎・文男遺文庫（服部文庫）」は、服部英太郎・文男研究者親子二代で蒐集した社会政策論・運動史・思想史関連の膨大な文献から成り立っている。この点に関する文男先生の記述から見て行こう：

私ははじめ「経済政策論」専攻でしたから、ヒルファーディングやレーニンやローザ・ルクセンブルクの古典的著作を勉強していましたが、「社会思想史」の講義を担当することになってからはまずフランスの空想的社会主義の研究に着手しました。私の父は第三高等学校ついで東京帝国大学の「英法」出身でしたが、三高時代の恩師でフランス革命史の研究で有名だった中村善太郎先生の影響もあり、また「政治学史」担当の小野塚喜平次先生の指示で社会主義政治学の研究を進めていましたので、東京・神田のフランス語学校「アテネ・フランセ」に通ってフランス語を学んでいました。しかし、東北帝国大学法文学部で「社会運動史」の講義を担当してからは、サン・シモンやアドルフ・ブランキやジョレスなどのフランス語文献を購入するとともに、研究の重点を次第にマルクスやエンゲルス、さらにはレーニンに移し、マルクス主義に関するドイツ語文献を蒐集するようになりました。1930年から33年までのベルリン留学はこの傾向を決定的なものにしました。

私は第二高等学校の「独法」出身でしたからドイツ語文献に親しみがありませんでしたが、父親と同じコースを歩むことになった「二代目」としては、おのずから別のルートを選ばざるを得ませんでした。「二代目」としての利点があることは否定できませんが、「二代目」にはいわば「悲劇」の要素もあるのです。父の蔵書のなかに稀覯本であるサン・シモンの『著作選集』三巻があり、このなかの「19世紀の科学的諸業績序論」は全集版に収録されておらず、従来ほとんど取り上げられていませんでしたので、まずこれを読むことから勉強を始めました。これはまた、サン・シモンに対するマルクスとエンゲルスの評価の違いを意識する契機ともなりました。また、フランスの社会思想の研究史ではソ連邦の研究を無視することはできませんが、父の大量の蔵書のなかにあるロシア語文献は『資本論』第一巻の首章の独露対訳本ただ一冊でした。以後、私はようやく商業ベースで購入可能となったロシア語文献の入手に努めたのです。（服部文男「これまでとこれから」、大村 泉・窪 俊一編『観の眼 見の眼－服部文男随想録－』服部先生の思い出を語る会 2008年3月、197-198頁）

以上全体が大変味のある文章であるが、ここでは「服部文庫」との関連で、下線部サン・シモン『著作選集』三巻に注目したい。これは『服部 英太郎・文男 遺文庫 目録』（尚絅学院大学 図書館 2012年7月）p.241の（Euvres choisies de C.-H. de Saint-Simon t.1-3, Bruxelles 1859 のことであり、そのt.1に含まれている『19世紀の科学的諸業績序論』（Introduction aux travaux scientifiques du dix-neuvième siècle, 1807, un volume ; 1808, deux volumes）が当該文献である。この貴重な文献に基づいて服部文男「サン・シモンの空想的社会主義における階級分析」論文（初出 1957年5月）がまとめられ、サン・シモンの評価に関するマルクスとエ

ンゲルスの見解が異なっていることと、サン・シモンに即して分析した結果両者ともに一面的であることを明らかにされた（服部『マルクス主義の形成』32頁、54-55頁）。

最後にもう一つの例を挙げて、服部文男先生の社会思想史研究への独自の関心と視点に触れておきたい。同上遺文庫『目録』164頁に Adolf Hitler, Eine Abrechnung (Mein Kampf: Bd.1) ; Die nationalsozialistische Bewegung (Mein Kampf: Bd.2), München 1939 (c1927) の記載がある。ヒトラーの原著は、戦後ドイツで発行が禁止されてきたため、現在入手困難な書物に属する（これに対し邦訳は、後掲のように「完訳」の形で1973年に出ている）。他方戦前の日本では、同盟国ドイツの最高指導者の書物として親しまれ、旧制二高のドイツ語の教科書にも選ばれていた。ところが当時でもただ受け入れられていた訳ではなかったことが、次の服部文男の証言で分かる。

「ただ私にはヒトラーの書物が教科書に選ばれているということよりも」（その教科書は三省堂から発行されていたが）「この書物が10ページぐらい削除されている、剃刀かなにかでページを切り取られ、表紙には『削除済』というゴム印が押してあったことの方が遥かに印象が強いのです。削除箇所は、このヒトラーの『我が闘争』のなかで日本人とそれから日本の政治体制とをこきおろした部分、批判した部分でありました。当時はもちろん、1940年以降のことです。ドイツは『盟邦』、同盟国であったわけでありますけれども、その同盟国の〔最高指導者〕ヒトラーの書物が日本の高等学校の教科書に採用されるときには削除されている。私はこの方にむしろ非常に強い関心をもちまして、その削除されたところがどこなのかを調べてみました。当時私の父の書棚にはそういうものがございました [これが「服部文庫」の上述記載文献！] ので、それと照らし合わせて何が検閲によって駄目になったのかということを知ったわけであります。日本人が非常に劣等な民族である、人種であるというようなことが書かれていたりすると、あるいは創造性のない人種であるというようなことが書かれていたところ [アドルフ・ヒトラー『完訳 わが闘争』(上) 平野一郎・将積 茂訳、角川文庫 [1973] 1974.3 四版、407-415頁 - 引用者] …そういったところが削除されているわけでございます。」「このとき以来人の心を表わす本というものが人為的に歪められている、あるいは削られているのではないかということについてずっと関心を持ち続けて来たわけであります」（服部文男最終講義「人と思想と本」、前掲服部『マルクス探索』226-227頁）。検閲というものの恐ろしさ、このようにナマに切り取られたり、伏字にされたり、戦後のアメリカ進駐軍のように書き直させて検閲の跡を消してしまったり、あるいはレーニンのように丸ごと原稿を没収されたり、発売禁止にされたり、出版される場合にも検閲を考慮して「奴隷の言葉」で書かざるをえなかったり等々。社会思想史の研究者は、そういう現実を知らねばならないというのである。

これは服部文男が旧制二高に入って間もなく、17-18歳の頃のことであるが、「その時の印象が非常に強烈だった」。服部文男先生の社会思想史研究の学問的・批判的視点の原点がここにあるように思われる。服部文男「最終講義」ではこの批判的視点を、御自身の座右の書：宮本武蔵『五輪書』及び柳生宗矩『兵法家伝書』に即して「観見二つの眼（まなこ）」として説明されている。「見」は「眼前にあるものを見ること、目で見ること」、「観」は「心で見ること」「心を開くなり」。この「二重の思考」を堅持することが大切だというのである（同上書239-240頁）。私流に上述ヒトラーの例で言うと、まず眼前にある削除されたヒトラーのテキストをあるがままに見ること（ヒトラーの書物でさえ、日本の国家にとって不都合な叙述部分は抹消される！それが検閲！）。そこからさらにそれが紙背で、心で語っている検閲・削除・歪曲

等々される前の真の姿を、心で観ること、心を聴くこと。そのようにして見えてきた姿の实在を証明する資料・文献等（この場合はヒトラーのオリジナル書物）を全精力を傾けて探求し、それらを分析し、目で見える形に表すこと。これが社会思想史研究の真髄だということになるであろう。恩師服部文男先生は、こういう姿勢を生涯貫かれた方である。

社会思想史・運動史研究のための宝庫「服部文庫」

－裁判報告『ライプツィヒ大逆罪裁判』（1872年刊）を例に－

橋 本 直 樹（鹿児島大学教授）

ご紹介いただきました鹿児島大学の橋本です。服部英太郎先生が学長をされた福島大学の卒業生であり — 先ほど発表された相澤先生の受講生にもなるわけです — 、服部文男先生を慕って東北大学大学院に進学しましてからはその教え子の最後の世代の一人でした。したがって、このシンポジウムで発表の機会に恵まれ大変光栄に感じております。

◆服部文男先生の『共産党宣言』研究

○文男先生の研究と『宣言』 文男先生の研究分野はカール・マルクス、フリードリヒ・エンゲルス、マルクス主義とそれに関連する思想史・運動史の領域と多岐にわたっておりますが、『資本論』、特にその形成史、『共産党宣言』、レーニン『帝国主義論』形成史が中心でした。なかでも現在の私の研究テーマに関係深いのは『共産党宣言』の研究です。

『共産党宣言』は、現在、『資本論』とともにマルクスの二つの主著の一つと一般には受け止められています。しかし、本来は1848年2月に「共産主義者同盟」というもっぱら手工業職人・労働者を主とする秘密結社の綱領として無署名で発表された文書です。さらに、その規約によりますと、組織の綱領としてはそもそも1848年のただ1年間だけ有効であると定められていました。そのような性格をもつ文書が、今では広く一般に、マルクスとエンゲルスの共同著作として、また社会科学上の一古典であり人類の学術遺産として知られ、読みつがれているわけです。よく言われることですが『宣言』は世界で『聖書』に次いで出版部数が多く、翻訳された言語やその点数も非常に多いのです。

○『共産党宣言』とは その内容を簡単にご紹介するのは大変難しいのですが、まずは同盟の綱領討議の総まとめであり、そしてなにより若い頃のマルクスとエンゲルスの思想の集大成です。彼らは資本主義社会における労働の辛さや人間の自己疎外を深く分析した疎外論の考え方、また経済的要素が社会全体を大きく動かす原動力になっていると見る社会や歴史の唯物論的把握を初めて打ち建て、資本主義社会の歴史、現状および将来の把握を行いました。『宣言』ではさらにそうした考え方を基にして当時のヨーロッパの展望が描かれています。特にドイツの見通しです。経済はすでにイギリスやフランスのような資本主義だ。が、当時のドイツの政治体制は、われわれに分かりやすく言いますと日本の幕末のように各藩に分かれた各邦国で形成されてきました。ですから、ドイツは、フランス大革命のように資本家が主人公となった政治的変革によって、資本主義経済体制に見合う政治制度にすぐにも移行するだろう、と彼らは見ました。そうなった後に、労働者たちが資本主義の成果の上に立つ、資本主義後の社会制度